

	<h1>空襲</h1> <b>SCE・Net 三平忠宏</b>	<b>E-76</b>  発行日 2015.5.26
---	------------------------------------	-------------------------------------

空襲のさなかなりけりをさなごのわれ気がつけば母にすがれり

私の最も古い記憶は、太平洋戦争の末期に故郷の館山で遭遇した戦争に関わるいくつかの出来事の断片である。昭和二十年の春に四歳になった私の周りでは、張りつめた雰囲気、銃後の生活が行われていたようである。今日をつむって当時を回想しようとする、戦時のあわただしい中で幼い私が我に返ったような、あるいは気が付いたら戦争の真っ最中だったというような不思議な感覚をおぼえる。

ただでさえ薄暗い電灯、その笠に黒い布が掛けられて、不気味で不安な夜を過ごしていた。よれよれの軍服を着た小父さんが、自転車で表の通りを走りながら、メガホンを使って「東部軍情報」を連呼し、空襲を予告するのを何回も見た。

海側に館山海軍航空隊の広大な飛行場があり、鏡が浦(館山湾)に多くの軍艦が来ていたことは知っていたが、実際の海軍の施設はこの飛行場だけでなく、館山海軍砲術学校や洲ノ崎海軍航空隊など大掛かりなものが多くあったことを、定年後館山にも住むようになってから知った。館山の周辺地域の砲台や特攻基地を合わせると、終戦時には七万の将兵が首都を守るために動員されていたのである。

昭和二十年の春といえば、記録からすでに制空権は米軍側に奪われ、連日のようにサイパン島からB 29の大編隊が飛来し、上空高く通過して東京や横浜方面に向かって行った。幼時にその銀翼の群れをきれいだと眺めていた記憶が残っている。空襲警報が頻繁に鳴ったが、海から遠く離れているわが家の周辺は、民家ばかりで比較的安穏であった。

それは寒い冬の朝だったと憶えているが、慌しく空襲警報が鳴り、やがて館山航空隊の方向から飛行機が、機銃音を響かせてわが家の方へ襲って来た。一月末に妹が生まれて、空襲があればいつでも防空壕へ連れて行けるように、柳行李の中に寝かされていた。しかし父は食糧営団へ出勤して不在、安房高女の生徒だった姉も朝のうちから勤労働員で出掛けていなかった。

産後まだ日が経っておらず、臥せがちだった母は一人で赤子を連れ出すことができず、厚い板の座卓の下へとっさに行李を押し込んで、私を促して防空壕に入るのがやっとであった。長男の私だけは助けようとしたのである。薄暗い壕の中で私は母に抱かれ、縋りついて機銃音が去ってゆくのを聞いていた。

空襲警報の解除を待ちきれずに、家に戻って行李を引き出すと、あからめた顔をくしゃ

くしゃにして妹は大きな声で泣いていた。この一連の出来事は、今も鮮やかに憶えていて忘れることはない。

定年後に入った南房総の戦争遺跡保存の NPO 活動で、この空襲の日は二月十六日だったことが分かった。十六日の早暁に、米海軍の機動部隊が房総半島野島崎の南方十数キロに接近し、数百の艦載機で攻撃して来たのである。

低空で進入して来たために、日本のレーダーでは敵機を捕捉できず、延べ千機以上による繰り返し攻撃で、館山海軍航空隊は滑走路や周辺の空地に置いてあったゼロ戦など迎撃用戦闘機を主に二百数十機を失った。この日以降日本は米軍機への迎撃力が大きく落ち、やがて B 2 9 による日本の都市への本格的な攻撃が始まり、三月十日の東京大空襲へつながって行ったのである。

周辺に軍用施設のないわが家の上空に、敵機が来たのはこのときだけである。機銃掃射で被害を受けた家はなく、あれは威嚇的なもので勝ち誇った米軍パイロットの遊び心によるものだったのではないかと今にして思う。

今年が戦争終結から七十年になるので、幼時の思い出をまとめた。短歌を始めて二十三年になり、冒頭の歌は二〇〇一年の作をこの一文のために作り直した。

以上